パネルディスカッション

15:00～16:30　　第１会場　大ホール

「タスク・シフト/シェアから
臨床検査技師のあり方を考える」

丸田　秀夫（日本臨床衛生検査技師会 代表理事）

馬場　朱美（山下病院）

位田　陽史（公立陶生病院）

丸山　篤芳（松阪地区医師会臨床検査センター）

司会　　伊藤　英史（刈谷豊田総合病院）

松浦　秀哲（藤田医科大学）

「タスクシフト/シェアから臨床検査技師のあり方を考える」

「タスク・シフト/シェアから臨床検査技師のあり方を考える」
日本臨床衛生検査技師会 代表理事　丸田 秀夫

「患者を看ることができますか？　～タスクシフトによる業務拡大から～」
山下病院　馬場 朱美

「タスク・シフト/シェア導入に向けた取り組みと今後に向けて」
公立陶生病院　位田 陽史

「タスク・シフト/シェアと地域・在宅医療との共通課題に関する考察」
松阪地区医師会臨床検査センター　丸山 篤芳

昨今、医師の働き方改革に端を発し、臨床検査技師のタスクシフト/シェアが話題になっている。本パネルディスカッションでは、日本臨床衛生検査技師会の丸田先生からタスクシフト/シェアの経緯と背景、臨床検査技師の将来についてご講演いただく。その後、様々な背景をもつ演者の先生方からタスクシフト/シェアの現状と課題についてご講演いただく。タスクシフト/シェアを入口に、臨床検査と臨床検査技師の未来についてディスカッションを通して本質に迫っていきたい。

演題番号：パネルディスカッション-1
演題名：タスク・シフト/シェアから臨床検査技師のあり方を考える
発表者：丸田　秀夫
所属：一般社団法人　日本臨床衛生検査技師会

2021 年 5 月、医師の働き方改革を推進するために関係法令の改正が行われた。その中の一つとしてタスク・シフト/シェアを推進するために、臨床検査技師等に関する法律が改正され、新たな行為の実施が可能となった。具体的には政令事項 2 項目、省令事項 8 項目の合計 10 項目もの業務が追加となり、本法改正は法律制定後、最も重要な改正の一つに位置づけられるものである。追加される業務を実施するためには、厚生労働大臣より指定された、日本臨床衛生検査技師会が主催する講習会に参加する必要があり、すべての臨床検査技師の修了が望まれる。法改正が行われたことは、我々臨床検査技師へ大きな期待を寄せられていることと理解し、現場実践により医師の働き方改革の推進に寄与するとともに、さらなる多職種連携の強化へ貢献する必要がある。また、AI、IoT 等をはじめとする技術革新が進展する中で、今後の医療の中で臨床検査技師が不可欠な存在であり続けるための一つの方向性を示す、重要な業務拡大であることも認識しなければならない。

略歴
1990 年 10 月～　佐世保中央病院　臨床検査技術部
2010 年 6 月～　日本臨床衛生検査技師会　理事
2014 年 6 月～　日本臨床衛生検査技師会　常任理事
2016 年 6 月～　日本臨床衛生検査技師会　常務理事
2020 年 6 月～　日本臨床衛生検査技師会　代表理事副会長

演題番号：パネルディスカッション-2
演題名：患者を看ることができますか？　～タスクシフトによる業務拡大から～
発表者：馬場　朱美
所属：医療法人山下病院　臨床検査部内視鏡科

タスクシフト／シェアによる法改正で、業務拡大となった行為における患者管理は非常に重要である。造影剤注入におけるアレルギー反応、生検時の出血、吸引行為における偶発症など、医療安全の側面からも、一医療人としての看護を求められる機会が増すことも予想される。内視鏡業務においては、患者対応、看護記録の記載、患者移送や移乗技術、迷走神経反射時等の把握と対応、最低限の薬理、緊急時対応等を会得する必要がある。実臨床において、長年の内視鏡技師としての経験とチーム医療の実践から学んだ「患者のケア」について考えるとともに、業務拡大で変化していくであろう「検査技師のニューノーマル」を考えてみたい。また、当院の特徴でもある内視鏡専従という特殊な組織構築について、経緯から現状、課題と今後の展望までを共有したい。

略歴
1998 年 3 月　藤田医科大学短期大学 衛生技術科 卒業
1998 年 4 月　医療法人山下病院 入職
　検査センター内視鏡室の専従臨床検査技師として従事
2001 年 4 月　第一種 消化器内視鏡技師資格取得
2014 年 8 月　小腸カプセル内視鏡読影支援技師認定
2015 年 4 月 ～ 2021 年 3 月
　日本消化器内視鏡技師会 国家認定推進委員会　委員
2018 年 4 月　東海支部消化器内視鏡技師会　理事
2021 年 4 月　日本消化器内視鏡技師会　教育委員会　委員

演題番号：パネルディスカッション-3
演題名：タスク・シフト/シェア導入に向けた取り組みと今後に向けて
発表者：位田　陽史
所属：公立陶生病院　臨床検査部

医師の働き方改革推進事業の一つとしてタスク・シフト/シェアがあげられ、昨年より厚生労働大臣指定講習会が開始された。各施設においても、タスク・シフト/シェアの導入に向けての検討を進めるとともに、指定講習会カリキュラムの履修に取り組まれていると思われる。
タスク・シフト/シェアにより実施可能となる行為は、現在検査技師が行っている業務の延長線上とされているが、施設の規模や技師の人数、業務の内容、臨床の考え方の違いにより、導入の可否や範囲が異なってくることが推察される。
当院においてもタスク・シフト/シェア導入に向けて、日常業務内容の見直しと、関連部門へのタスク・シフト/シェア導入の必要性について確認を進めている。
今回は、当院におけるタスク・シフト/シェア導入に向けた取り組みについての紹介と、タスク・シフト/シェアの今後の展望について、皆さんと議論したいと考えている。

略歴
2001 年 3 月　藤田学園医学技術専門学院　卒業
2001 年 4 月　公立陶生病院　入職
2019 年 7 月　公立陶生病院　臨床検査部　室長

演題番号：パネルディスカッション-4
演題名：タスク・シフト/シェアと地域・在宅医療との共通課題に関する考察
発表者：丸山　篤芳
所属：松阪地区医師会 臨床検査センター

臨床検査技師が資格化されて以降，臨床検査技師が担う業務範囲は都度拡張されてきた。この経緯は業務過多にある医師，看護師の業務負担の軽減を主目的としており，今回のタスク・シフト/シェアに関しても，医師の働き方改革に伴い検討されてきた。新規に追加された業務内容をみると，当然のことながら“患者個人との接点”が増える項目が多い。結果として，病棟や処置室を持つ医療提供施設では，検査室の外での業務機会が増えるだろう。しかしながら，近年の臨床検査は，検体数や項目数の増加，そして，検査結果の迅速報告や経営改善の要求に応えるために，検査業務の効率化や省力化の必要に迫られ，そこに検査技術の進歩・向上，発展が加わり，いわゆる院内における臨床検査室の中央化，測定の集約化が図られてきた。この経緯は，いわばタスク・シフト/シェアで方向付けられる業務のベクトルとは逆方向である。したがって，タスク・シフト/シェアに関する新規業務を臨床検査技師の日常業務として医療現場に定着させようとすると，様々な課題に直面するだろう。これら課題のひとつである“患者個人との接点”に着目すれば，病院であれ，地域・在宅医療であれ，“個人的価値観の客観的評価の可否”という共通課題が根底に存在すると考えられる。このように今回のパネルディスカッションでは，臨床検査技師業務の形態変容を踏まえ，避けることのできないいくつかの課題を深掘りしていきたい。

略歴(主なもの)
1995 年 4 月　大阪大学医学部附属病院 臨床検査部
1998 年 5 月　三重大学医学部附属病院 中央検査部・輸血部
2010 年 5 月　同　オーダーメイド医療部
2013 年 1 月　三重大学社会連携研究センター 地域イノベーター養成室
2015 年 4 月　同　産学官連携アドバイザー 松阪地区医師会 臨床検査センター